

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月14日現在

機関番号：32644

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652072

研究課題名（和文） 魚霊供養からみる海洋資源の利用と変化
—魚霊供養碑データベースの構築

研究課題名（英文） Use and change of the marine resources from the viewpoint of funeral rites for marine life; construction database on monuments to pray for marine life

研究代表者

田口理恵（TAGUCHI RIE）

東海大学・海洋学部・准教授

研究者番号：70390713

研究成果の概要（和文）：日本では、身近な動植物や道具類は、霊魂を宿すとされ、古くから生き物に対する供養が行なわれてきた。人間ではないものへの供養習俗は、仏教的アニミズムに彩られた日本独自の動物観や生命観を映すものとして注目され研究されてきたが、魚介類への供養は、断片的に紹介されるだけだった。そこで本研究では、水棲生物に絞って、供養碑の全国的分布や建立背景について調査をした。その結果、全国に水棲生物を祀った碑は約1300基あり、近代以降により盛んに建立されるようになったことがわかった。明治以降の供養碑の増加は、供養主体や供養対象、建立契機の多様化とともに進むが、その過程は、日本の近代水産業の発展過程を映している。

研究成果の概要（英文）：Japanese folklore studies concern Kuyo for non-human being as reappearance of Buddhism-Animism or original recognition of nature and life in Japanese culture. Especially, we deal with monuments for life in water and explore how and why people monumentalize life in water. From 1300 cases, we examine many varieties among monuments, the kind of animal prayed, total of monuments on each region, and background of them. Comparing total numbers of monuments at each age, it would be evident that the greater part of them were made in modern age, and Kuyo for life in water is not old tradition, but keeping up by now, according to development of modern fishery.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	0	1,100,000
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	240,000	3,240,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：物質文化、海洋教育、データベース

1. 研究開始当初の背景

(1) モノから見る文化社会

報告者は、本研究に取り組む以前から物質文化研究の可能性を追求してきた。具体的な

モノを基点に環境と人間の関わりを考えると、そして、モノのデータベース構築と地域の事例研究の組み合わせた、ミクロマクロを往還する視点による統合的研究の有効

性を明らかにすることに取り組んできた。本研究は、それまでの研究で鍛えてきた方法をいかし、供養碑というモノを基点に展開した研究となる。

(2) 民俗学の生き物供養研究

日本では古くから、死んだ動物を吊い、供養することが行なわれてきた。動植物も人間同様に霊魂が宿るとみなし、吊い祀る生き物供養の習俗は、日本独自の生命観・自然観を示すものとして民俗学分野で注目されてきた。もっとも、これまでの研究では、生き物供養習俗の全体的な把握と議論が中心で、そのため魚類の供養は断片的に紹介されるだけだったともいえる。水棲生物の供養は、クジラやウミガメ以外は、全国的な分布調査がなされていなかった。そこで、水域の生き物に限定して供養や祀りに関する調査を行い、全国的な動向を把握しようと考えた。悉皆的な調査によってはじめて、民俗学的研究が指摘する伝統的な自然観・生命観の変容なり現状を明らかにすることができると考えた。

(3) 海洋教育における文化の問題

2007年に我が国で施行された海洋基本法では、第28条において、国民が海洋についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育、社会教育を通じた海洋教育の普及が提唱されている。沿海地域の人々にとって海は暮らしと直結し、ある意味で海は「文化」の問題でもあるが、海洋基本法には「文化」に関する項目が存在しない。地域住民と生き物である水産資源との関わりは、水産資源や水棲生物の生育環境の保全と管理・改善等の環境保全の整備事業や漁業の経済振興だけでなく、住民の自然観・生命観も含めた「文化」の面もあわせて現状を理解していくことが必要になる。特に海洋教育・海洋研究では、自然科学分野が強調されており、沿海地域において、暮らしや「文化」の問題を取り込んだ総合的な海洋理解とその教育実践はどうあるべきかが今後の課題になるだろう。その「文化」をいかに描き出すのかを考えたときに、水域の生き物に対する供養や祀りのシンボルとなる供養碑というモノからのアプローチが有効だと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、水域の生き物を祀った供養碑というモノを手がかりに、日本における水産資源と人間との関わりや、自然観、生命観を見直すことである。水産資源の利用に見

る地域的な特徴をつかむとともに、自然観・生命観の変容を明らかにするためには、魚霊供養碑の全国分布の把握と、個々の碑の建立背景等を検討することが必要と考え、水域の生き物を祀った供養碑データベースの構築を作業課題とした。

3. 研究の方法

水域の生き物のために建てられた人工物（供養碑）について、その全国分布を把握するために、文献研究、アンケート調査、現地調査を組み合わせつつ碑の情報を集め、基礎データベースの作成を進めた。

アンケート調査では、全国の海面・内水面漁協および水産試験場など2144関係団体に対し、漁獲物に対する供養や供養碑に関するアンケート用紙を送り、896件の回答を得ることができた。そのうち222件が供養碑や祠、記念碑などの祀りの対象となる人工物があり、184件の回答が祭事はあるというものだった。

アンケート結果と文献資料や現地調査などで確認した碑を1基1件でリスト化していった。供養碑といっても、本研究では、水域の生き物を祀るために設けられた人工物を広く供養碑と位置づけており、石製の碑のほか、石塔、祠、社、塔婆、位牌、土盛りをした塚、石灯籠、過去帳など、多様な形態の人工物の情報をリスト化している。そして、現時点で碑の数は1300基となった。

4. 研究成果

(1) 地域性

水域の生き物を祀った人工物の情報を集めてきた結果、人工物（供養碑）は、全都道府県にあること、沿海のみならず内陸にも内水面漁業の関係で建てられた碑が多く存在することがわかった。また、地域によって供養碑の多少が見られ、供養碑が多い都道府県を挙げると、北海道、秋田、千葉、東京、静岡、愛知、三重、愛媛、長崎、大分などになる。また、三陸沖沿岸や豊後水道の両岸、熊野灘沿岸、広島湾沿岸、五島列島周辺、八郎潟周辺、銚子、知多半島など、供養碑が集中している地域があることも確認できた。

(2) 祀られた生き物

供養碑の碑名に登場し、供養の対象とされた水域の生き物をあげる。アコヤガイ、アサリ、アシカ、アマゴ、アユ、アワビ、アンコウ、イナ、イルカ、イワシ、イワナ、ウナギ、

ウミガメ、ウミホウズキ、エビ、オットセイ、カイ、カエル、カキ、カツオ、カニ、キンギョ、クジラ、コイ、コノシロ、コンブ、サケ、サザエ、サバ、サメ、サワラ、シジミ、シラウオ、シンジュ、ジンベイザメ、スッポン、タイ、タコ、ドジョウ、トド、ナマコ、ナマズ、ニジマス、ニシン、ノリ、バカガイ、ハタハタ、ハマグリ、ハマチ、フグ、ブリ、ヘラブナ、ボラ、マグロ、マス、ヤツメ、ユムシ、ラッコ、ワカサギの60種である。

供養祭の対象とされ、「アナゴ供養祭」や「イカ祭」などのように祭事に名前があがる生き物も加えると、祀られた生き物は70種類にもなる。

以上の個別の生き物を祀った碑のほかに、さまざまな種類の漁獲物をまとめて祀った碑というものもある。碑名は「魚」「諸魚」「小魚」「湖魚」「淡水魚」「活魚」「魚霊」「魚魂」「魚族」「魚鱗」「鱗」「魚貝」「魚介類」「魚貝海虫」「魚貝藻」「魚介類・海苔」「海獣魚類」などとなる。さらに「鴨魚」「魚鳥」「魚獣禽鳥」「鳥獣魚」「山海漁獵」「虫魚鳥獣草木」「畜類蚕魚家禽」「畜霊魚霊」「萬霊」「放生」など、陸の生き物もいっしょに祀っている碑もある。エビスさまやヒルコさま、安波さま、阿弥陀仏さまなど、漁村それぞれで信仰してきた海の神さまの祭事を、魚介類の供養も兼ねて行っている場合もある。

供養碑に祀られた生き物は魚類、藻類から棘皮動物、軟体動物（貝類、タコ、イカ）、甲殻類、両生類、鯨類、海獣までと対象は幅広い。

(3) 時代性

供養碑には、それを建てた人々の自然や生命への思いとともに、建立時の時代状況が刻み込まれている。

建立時期から供養碑を見ると、水域の生き物を祀った碑には、中世やそれ以前の出来事を伝える由来や伝承を持つ碑もあるが、捕鯨や漁撈など、人が生命を奪った生き物を想って建てた供養碑が登場するのは江戸時代になってからといえる。殺生した生き物のための供養碑は、江戸時代以降も建てられ続け、21世紀建立の供養碑も少なくない。

江戸期建立の供養碑は、クジラを対象としたものが圧倒的に多く、クジラの供養碑は17世紀から各地で建てられるようになる。イワシやサケ、ニシン、マグロなど、魚類への感謝と慰霊のために建立された供養碑が登場するのは18世紀からとなる。

明治以降は、技術発展による漁獲増や漁場や販売先の拡大など、事業成功を理由に供養

碑が建てられる例も出てくる。昭和に入ると、アユ、アマゴ、サケ、シンジュ、ニジマス、ノリ、食用蛙など、養殖関係者が建立した供養碑が登場する。そして、漁業や養殖業などの生産分野のみならず、魚商や卸売市場などの流通分野や、料理組合や加工食品会社などの加工分野まで、水産業界のさまざまな事業者が供養碑を建てるようになる。戦後には、「魚霊碑」「魚魂碑」のような包括的な碑銘の碑が建てられるようになり、それは、漁協にとっての漁獲対象全体や、水産試験場が扱う実験魚全体など、数多くの生物をまとめて祀った碑である。つまり碑の建立は、近代になってより盛んになり、明治以降の供養碑の増加は、供養主体や供養対象、建立契機の多様化とともに進んできたといえる。

(4) 研究成果の発信

本研究では、段階的に調査成果をまとめることで、作業課題の進捗や問題を確実しつつ進めてきた。そして、調査成果のまとめは、雑誌論文や学会などで積極的に発表し、最終年には成果を本にまとめることができた。

供養や祀りの問題について理解と議論を深めるために、東海大学海洋学部にて研究会などの機会をもうけた。2009年度は、講師を招聘しての研究講演会を2回、調査報告会を2回、2010年度は調査報告会を2回、2011年度は調査報告と編集会議のための集まりを数回もった他に、12月10日には総括としてのお魚供養研究会シンポジウム「水産資源と文化—魚介類のいのちと感謝のこころ—」を実施した。

学内での研究集会実施の他に、日本学術振興会の異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業「日本の環境思想と地球環境問題—人文知からの未来への提言」および人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」が主催する研究会やフォーラム（2012年2月19日）でも、本研究の成果を発表してきた。また、第12回、13回のジャパン・インターナショナル・シーフードショーでのパネル展示（2010年7月、2011年7月）や「お魚供養写真展」の実施（於東海大学海洋学部、2010年11月1～3日、2011年11月1～3日、於隠岐島・西ノ島町中央公民館、2012年2月19日）などを通して、研究成果の社会発信にも積極的に取り組んだ。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 関いずみ、田口理恵、漁村における水域生物の供養の現状と意義、北日本漁業、査読有、39号、2011、199-205
- ② 田口理恵、関いずみ、加藤登、魚類への供養に関する研究、東海大学海洋研究所研究報告、査読有、32号、2011、53-97
- ③ 田口理恵、水域の生き物たちを供養すること、BIOSTORY、査読有、14号、2010、68-69

〔学会発表〕(計2件)

- ① 田口理恵、関いずみ、寄りくるめぐみと迎えるところーお魚供養調査からみた隠岐、古事記編纂 1300 年記念フォーラム「隠岐自然と文化の再発見」、2012年2月19日、西ノ島町町立中央公民館
- ② 関いずみ、田口理恵、漁村における水域生物の供養の現状と意義、北日本漁業経済学会第39回札幌大会、2010年10月22日、北海道大学

〔図書〕(計1件)

- ① 田口理恵編、魚のとむらいー供養碑から読み解く人と魚のものがたり、東海大学出版会、2012、86頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 理恵 (TAGUCHI RIE)
東海大学・海洋学部・准教授
研究者番号：70390713

(2) 研究分担者

加藤 登 (KATO NOBORU)
東海大学・海洋学部・教授
研究者番号：70349330
関 いずみ (SEKI IZUMI)
東海大学・海洋学部・准教授
研究者番号：20554413